

「民俗芸能」を舞台上で上演するには

〔日 時〕 平成29年7月4日(火) 18:30～20:30

〔会 場〕 沖縄産業支援センター

〔参加人数〕 28名(受講者25名、関係者3名)



〔講 師〕 茂木 仁史 (国立劇場おきなわ調査養成課長)

1981年より国立劇場で歌舞伎・民俗芸能・雅楽・声明・琉球芸能等の企画・制作・演出を手掛ける。2001年より3年間の基金部担当を経て、04年より国立能楽堂・09年国立演芸場の企画制作。現在、国立劇場おきなわ調査養成課課長として、琉球芸能の調査研究と組踊伝承者の養成に携わる。著書に平凡社新書『入門日本の太鼓』ほか。

▶ 概要

地域の祭礼や行事などで代々受け継がれてきた民俗芸能とは何か。民俗芸能のルーツを交えながら、舞台上で上演するための考え方を解説。

●民俗芸能とは何か

民俗芸能とは、地域の祭礼や行事などで代々受け継がれている芸能のこと。興行目的の歌舞伎や、宮中で行われる雅楽などと区別されてきた。殊に、民俗芸能は郷土芸能とも呼ばれ、もとをたどれば地域に暮らす人々の願いを霊(神)に伝える、宗教的な祈りから誕生した。

さらに、地域の人々の願いが叶えられたときや、これから起きる良いことについても、あらかじめ霊に感謝して芸能を奉納する。そのため、たとえ歌舞伎や雅楽であっても、地域住民が地域の行事として演じ伝承していけば、民俗芸能となるのだ。古来、地域の豊作祈願や雨乞いのために歌や踊りが行われ、巫女が霊を呼び憑依するために行った旋回運動が洗練されて舞になってきた。また、よそから伝播してきた芸能が、地域で伝承される中で変化して独自のスタイルになっていくことも、民俗芸能の魅力である。

●沖縄特有の芸能が生まれてきた経緯

沖縄の民俗芸能の一つに、エイサーがある。もともと、仏教の普及のために伝来したもので、最初は一



講座風景

の踊りだった。しかし、県内各地に伝播し、さらにその地で年に1度の伝言ゲームのように伝承する過程で、地域ごとにスタイルが異なっていく。さらに、戦後に行われたコンクールによって大胆な創意工夫が加わり、地域の青年会などに根付いた。グローバル化の進む現代では、エイサーは字(あざ=町や村の一角)から沖縄全体に広がり、さらに洋楽なども取り入れられて人気を博している。

他にも、首里王府で行われていた組踊や舞踊、路次

楽（行進曲）なども、地域に入り、姿を変えつつ傳承されている。視野を広げれば、獅子舞なども広くアジア一帯に伝わる芸能だが、それぞれの国や地域により姿を変えながら傳承しているのだ。

また、民俗芸能は地域住民が一緒になって歌い、踊り、参加することで、お互いの絆を深めてコミュニティを強固にするなど、副次的な機能も果たしている。

●民俗芸能を舞台上で上演する、公演の役割

民俗芸能を舞台上で上演するとき、芸能だけではなく、背景にある歴史や環境、そこで培われてきたアイデンティティなども大事にして欲しい。そのためには、パンフレットや解説、時には事前の講座なども行って、観客の深い理解と共感が得られるように工夫すると良いだろう。

劇場で民俗芸能の公演を行うことは、観客にとっては、その地域との距離や時間、移動の経費まで軽減でき、さらに、照明や音響設備、座席まで備えた環境で鑑賞に集中できるメリットがある。そこで強い関心を持ってもらえれば、地域やその芸能にとっても活性化につながる糸口が得られるに違いない。公演は、いつも観客と芸能の素晴らしい出会いの場になるべきなのである。

●民俗芸能の舞台づくり

では、地域に息づく芸能を舞台化するとき、どんなことに気を付けるべきか。最も心がけるべきことは、

地域的信仰や集团的結束を侵さないよう細心の注意を払うこと。まず、舞台化に向けて、地域へのリスペクトが根底になくてはならない。公演を行うことは経済行為でもあるから、何でも地元の通りにという訳にはいかないが、演目や人数なども何が大事かを見極め、地元の人たちの理解を得ながら、その真髓を舞台化して観客に届けることが望まれる。

また、舞台づくりによって、地域を消費するのではなく、地域の暮らしと想いをすくい上げ、そこから舞台のコンセプトを組み立てる。民俗芸能には、地域で暮らす人々の願いが凝縮している。だからこそ、舞台上で、より魅力的に伝えられるようにしたい。それぞれの民俗芸能の特徴や裏側にある思いを、どのように観客に伝えるかが、舞台制作のもっとも大事な仕事である。

●地域の信頼性を育むこと

質疑応答で会場から、「沖縄の民俗芸能公演で心に残ったものは？」という質問が挙がった。茂木氏は、国立劇場おきなわで行われた「民俗芸能公演 沖縄本島民俗芸能祭（八重瀬町）」について紹介された。その公演は、八重瀬町出身の神谷武史氏が構成・演出したもの。神谷氏の地元ということもあり地域の人々との信頼関係があって、大胆に構成しながらも民俗的コンセプトを損なうことのないものに仕上がっていたと、これから制作を志す人たちにアドバイスが送られた。



民俗芸能公演の事例（国立劇場おきなわ）



地域の文化担当者から、これから民俗芸能に関わりたいう思いが語られた